

## 【ハイチ大地震災害救援活動】

12 階 A 病棟看護師 河合 結子

2010 年 1 月 12 日、ハイチ共和国で大地震が発生しました。私は被災して約 2 週間後の 1 月 26 日より約 1 カ月間の任務期間で、現地での救援活動を行いました。

到着した頃、初動班は活動拠点地を決定し、診療所の設営を開始したところでした。私はチームに合流し、1 日平均 100 名前後の患者の治療にあたりました。診療所の運営に伴い、現地の医療スタッフを雇用して、協力して診療活動を行うと共に、日赤職員は監督者および管理者としての役割に回りました。

患者は、発災直後から 2 週間までは外傷や下痢、呼吸器感染症および皮膚疾患などが多く、徐々に不眠や慢性的な身体の不調を訴える内科系の患者が増加していきました。そのため、衛生状態の悪化を防ぐため基本的な公衆衛生教育の普及が必要とされており、診療所を運営する傍ら、被災者やハイチ人看護師への衛生教育を行うことを計画しました。

一方、避難民キャンプは大きいところでは 1 万人以上もの人口が密集しており、麻疹など感染症の流行が懸念されはじめていました。そこでハイチ政府、WHO やユニセフがイニシアチブをとり、首都ポルトープランスで予防接種キャンペーンを開始し、日赤を含む各国赤十字社 5~6 社が共同で各避難民キャンプを巡回していきました。予防接種は、最も経済効率が良い保健介入の一つと評価されています。乳幼児を抱えた多くの人々がその必要性を理解し、予防接種に足を運んでもらえたことは、とても嬉しいことでした。

発災より 1 ヶ月が過ぎた頃、物資の配給などの基本的ニーズはある程度充足されつつありましたが、多くの被災者は避難所生活を余儀なくされたままでした。復興支援のアセスメントが国際赤十字連盟や各支援団体によって始められたのもこの時期でした。初動班は後続班に引き継ぎを行い、2 月 26 日に活動を終了しました。

私は、今回の救援活動から様々な経験を積むことが出来ました。現場では、多くの医療施設が倒壊し、復旧のめどが立たない状況であり、医療救護班には多くの役割が求められました。医薬品や衛生材料の不足もあり、あるものを有効利用する工夫も必要でした。気候や治安面において、健康管理と安全管理には細心の注意を払いながらの活動でした。活動中、多くの人々とのふれあいを通して、大切な家族や財産を失った被災者への「こころのケア」を行える専任要員も必要と感じました。

被災者の方々が少しでも元気を取り戻し、一刻も早い復興がなされることを願っています。

現地看護師に技術指導を行っている河合看護師

